

ふれあいを大切にする 「就学前児童対象の子育て支援活動」

報告者：北海道社会福祉協議会 福祉教育専門委員会 委員 赤沼 宏樹

- ・視察日時：令和元年11月29日(金)
- ・視察場所：青空幼稚園子育てサポートセンター(苫小牧市柏木町2丁目5-1)

○学校の概要

北海道苫小牧南高等学校(以下、苫小牧南高等学校、南高)は昭和51年に開校し、3年前の平成28年に創立40周年を迎えた高等学校である。この40年の間、昭和55年に胆振管内教育振興実践表彰受賞をし、昭和58年には北海道教育実践表彰受賞、平成19年には文部科学省研究指定校として「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」(~20年度)を推進、平成25年から3年間は北海道教育委員会の「北海道高等学校学力向上推進事業」協力校となっている。また、今年度より英語教育を重視し、短期のオーストラリア留学に取り組み始めている。

本事業に関わっては、第40期指定(平成31年度~)で今年度は短期指定として実施してきたが、先日の福祉教育専門委員会において中期指定への移行が決定した。

○活動における特色、着目した点

苫小牧南高等学校では、活動のねらいを就学前児童やお年寄り、小学生とのふれあいを通じた人としての成長、活動を通して地域への関心を促し、貢献する態度を育てることにおいている。今回の視察では多感な高校生にどのようにしてボランティア精神が培われていくのかという点に着目した。

さて、活動に参加している生徒は生徒会外局のボランティア局に所属しており、現在局員は20名である。かつては男子部員がいたこともあったが、現在は女子部員だけで構成されている。

南高のボランティア活動は今回視察した子育て支援を含め、小中学生を対象とした学習支援・老人保健施設における利用者との遊びを通じた介護学習の3本を柱として受け継がれ、長く取り組まれている。

今回の視察にはなかったが、7月に実施した小学生を対象として夏休み宿泊研修『わくわくサマースクール2019』では17名の小学生4・5年生が参加し、「地域の活性化」「集団生活を通じた互いのコミュニケーション能力や協調性の向上」などをねらいとして行われている。

この活動は、東日本大震災で被災した子供たち“気仙沼キッズ”を苫小牧市が受け入れた際にボランティア局の生徒が支援を申し出て、町内会と繋がりをもったことが始まりである。生徒は参加する小学生の募集から食事、レクリエーション等の内容を自分たちで計画し、宿泊先の苫小牧市の念法寺で、充実した活動をしたとのことである。

この他に「町内会夏祭り」「町内会クリスマス会」「苫小牧港祭り」「苫小牧スケート祭り」のボランティア等地域の依頼を受けて参加する活動がある。

平日の活動は路線バスを利用しての移動、土日の活動は各家庭の送迎に頼ることとなり、ボランティア活動に参加するための交通費や活動に必要な経費などの負担が課題となっている。

○生徒の様子

当日、子育てサポートセンターには11名の乳児(0～1歳)が昼寝をしており、15時過ぎに学校から路線バスを利用して7名の生徒が到着した。子育てサポートセンターに入ると、礼儀正しく保育士に挨拶をし、すぐにエプロンを着用し、手指のアルコール消毒を行なった。

- 15:15 オムツ交換…乳児の気持ちをほぐしながら、実に手慣れた様子で交換
- 15:21 おもちゃの後片付け…乳児にできることをさせながら、後片付けをサポート
- 15:25 絵本の読み聞かせ…少し照れながらも、ゆっくり、やさしく読み聞かせ
- 15:30 手遊び歌…乳児のため、模倣できる子は殆どいなかったが、笑顔で手遊び歌を歌う生徒を注目し楽しそうに参加していた。
- 15:40 ママゴト遊び…保育士から「持つことしかできないので、どんな使い方をするのか声をかけながら遊んでほしい。」と説明を受ける。その後、指示通り、乳児と遊びながら、BGMに合わせて歌ったり、踊ったりしていた。
- 15:56 おやつ…パンやバナナ等のおやつを小さく刻んで食べさせる(お迎えの遅い児童のためのもの)。

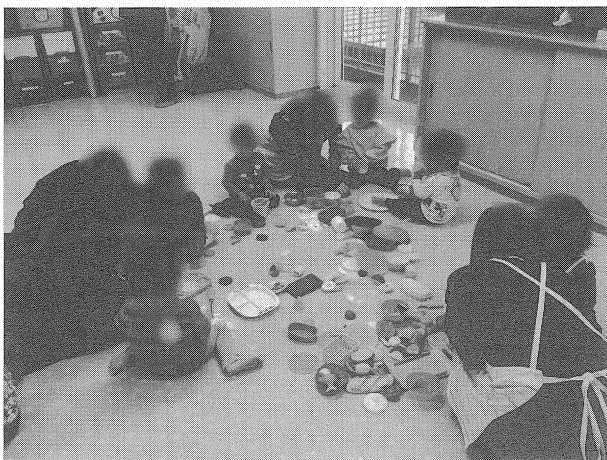
中間テストで事前の準備もあまりできず、また今年度2回目の訪問ということであったが、終始笑顔で上手に乳児のお世話をしていた。



手遊び歌



絵本読み聞かせ



おもちゃ遊び



パプリカを歌いながら

○意見交換の内容 ○福祉教育専門委員としての感想

子育てサポートセンターのボランティア活動を視察した後、勝木校長、ボランティア局顧問の吉岡教諭、苫小牧市社会福祉協議会の一谷氏、田村氏、本会の三上主事、赤沼の6名で意見交換をさせていただいた。意見交換を進める中で「見守る」「繋ぐ」「広げる」の3つのキーワードがポイントになると考えた。

「見守る」

4月に着任された勝木校長はボランティア活動で大切なことは単なる“お手伝い”に終わることなく、生徒が試行錯誤していく中で経験を積み重ね、自主性が培われることであると話している。

顧問の吉岡教諭は、子育てサポートセンターに到着後、保育士に挨拶をした後は、部屋の隅で正座をし、ずっと笑顔で生徒の活動を見守っていた。その素敵な人柄を感じ取ってなのか、乳児数名が吉岡先生に近づいて遊んでもらおうとしている場面があった。

地域で活動をする場合には、どうしても生徒にきちんと活動をさせようという学校としての思いが強くなってしまいがちである。しかし、生徒を成長させるために、活動では生徒の自主的な取組を大切にしていきたいという思いがボランティア精神を培う上で大切であり、活動を「見守る」という姿勢に現れていた。

「繋ぐ」

毎年、3年生は夏でボランティア局を引退し、その後は1・2年生で活動を行なっている。しかし、どの活動も事後の振り返りをしっかり行い、「よくできたこと」「改善をした方がよいこと」を確かめ、次の活動に活かすようにしていると吉岡教諭の話である。この事前と事後の活動の定着が苫小牧南高等学校としてのボランティア精神を先輩から後輩へ途切れることなく繋げていくポイントになっている。特に3つの柱としている「小中学生対象の学習支援活動」「就学前児童対象の子育て支援」「老人保健施設での介護学習活動」には、基本的に全員が最低一つには関わるよう促しており、生徒が入れ替わっても活動が絶えず継続している要因となっている。

「広げる」

苫小牧市社会福祉協議会では、苫小牧市内の学校で取り組まれているボランティア活動を紹介するなどして、他校の活動を参考にして、活動が広がるように取り組まれている。また、勝木校長の話では、道内の文化活動を交流する場もあり、他校のボランティア活動を知り、参考にするなどして、さらに活動を充実させることができることである。

ボランティア局の活動が校内で紹介される場面が多くはないと聞いた。20名の局員が地域との繋がりを太くもって、繋がった地域の方を笑顔にしていることをボランティア局以外の他の生徒にも知ってもらい、ボランティア活動に対する興味・関心を高めていけるとさらによいのではないか。

勝木校長が前任校で胆振東部地震の後、生徒が交流したお年寄りの安否を心配して、自主的に連絡を取り、支援する活動をしたことを一言も聞かされず、後に地域から話を聞いて驚いたことがあったそうだ。苫小牧南高等学校のボランティア局も生徒が学校の休みを利用して現地へ赴き、支援の活動を行なっている。生徒たちのこの行動は、ボランティア精神が確実に培われている証であり、これからの社会をリードしていくのに相応しい人材に育っている。